

第2章 事例研究

1. 3年保育3歳児S児

中野 淳子

S児は語彙が豊富で、絵本や図鑑等から得た知識も豊富である。それを人前で話すことも好きである。一人っ子であり大人の中で生活してきたこともあり、大人に話を聞いてもらうことを好み、大人と言葉を通してやりとりをすることに抵抗はない。しかし、着替えやトイレの始末等、できないことがある時には、やってみないで最初からあきらめたり、「手伝って」とは言えず「できな一い」と大声をあげてアピールしていることが多い。

まずは、できないことや苦手なことがあっても安心して教師に甘えられるようになってほしい。そして、頭で考えるよりも体を動かしてその雰囲気を楽しめるように援助していきたい。

事例1 「できな一い」

5月14日(月)

登園時の活動をしている時である。幼児らが次々に保育室に入ってくる中、S児も元気に保育室に入ってきた。しばらく、テラスや保育室をうろうろしながら、友達が遊ぶ様子を見ていた。ほとんどの幼児が着替えをしている中、そのままの服装なので、教師はS児に声をかけた。

教師 「S児君、そろそろ着替えようか」

S児 「S児、着替えない」

教師 「着替えると動きやすいよ。」

S児 「着替えなくても大丈夫」

教師 「そうかあ。でもねえ、幼稚園では着替えて遊ぶ約束なんだ。

幼稚園は身体をいっぱい動かすから、汗もいっぱいかくんだよねえ」

S児 「S児、汗をかいても大丈夫なんだ」

着替えずに済むように理由を考えているようだった。着替えるのが苦手なのではないかと思い、本音を聞こうと思った。

教師 「着替えるの苦手？」

S児 「大丈夫」

目をそらしながら、S児は鞆と帽子を付けてロッカーに向かった。運動着を手にして着替えコーナーに戻ってきたが、運動着をカーペットに置いたまま、またうろうろ歩き出した。5分程見ていたが、着替え始める様子はなかった。

教師 「S児君は、うろうろするの好きだねえ。ここで（畳）着替えてごらん」

そう言って、S児の手を引いて畳に誘導した。他の幼児の着替えの手伝いをしていると突然、教師の前にやってきて背中を向けて大きな声で言った。

S児 「できな—い！」

教師 「うん？」

S児 「できないの！」（怒ったように）

教師 「エプロンのボタンが外せないの？」

S児 「そう！」（慫慂として）

教師 「後ろのボタンは難しいよね。先生外そうか？」

S児 「うん」

教師 「初めはできなくても大丈夫。

困ったときには、先生が助けてあげるからね」

S児 「ありがとうございます」

丁寧にお礼を言って自分の着替えの場所に戻った。ほどなく教師のところへやってきて、全く自分で脱ごうともせず大きな声で言った。

S児 「できな—い！」

教師 「今度は、何ができないの？」

S児 「S児、これが脱げないんだ」

教師 「Tシャツが脱げないのかあ。じゃあ一緒にやろっか」

S児 「S児できないの」

教師 「大丈夫、先生と一緒にやろうよ。

これはここをこっちの手で引っ張って・・・」

手には力が入っていなかったので「ぎゅっと持って」など声をかけ、手を添えながら一緒に着替えをした。着替え終わると丁寧に大人のようにお礼を言った。

S児 「ありがとうございます」

教師 「どういたしまして、困った時にはいつでもどうぞ」

安心したように頷いて、テラスに走っていった。

(1) S 児の自己表現のあり方

○自分の苦手なことをごまかそうとする表現

S 児は、自分一人では着替えることができないので、着替えを避けようとしているように思われた。それを教師に知られるのが嫌で、「着替えなくても大丈夫」という表現になったと思われる。本音を素直に表出できるようにと「苦手？」と聞いてみたが、それにも「大丈夫」という返事だった。苦手なことを伝えられるほど、教師に対しての安心感をもてなかったのだろう。

○教師に助けてもらったり、甘えたりできない表現

S 児は一人っ子ということもあるが、自分のできないことを他者に頼むという経験がないようだった。そのため、「できな—い」と言葉にはしても、「手伝って」ということができなかった。「手伝って」と言えないのは、他者に助けを求める経験がないことと教師に対して安心感を持っていないことが原因として考えられる。

○できないことを素直に教師に伝える表現

教師はエプロンのボタンを外す時に、S 児に「できなくても大丈夫、困ったときには言ってくればいい」と安心感を与えるように援助した。そのため、S 児は次からは何ができないのかを素直に言葉にできるようになった。母親のように頼れると思った相手には自分の思いを素直に表出できるようだ。

○決められたお礼の表現

S 児は、大人に対して話しかける時や、相手に関係なく話す時には、丁寧な言葉を使う。本事例でも、教師に手伝ってもらったので、「ありがとうございます」という決まったお礼の言葉を口にした。

(2) S 児の社会的側面の学んだこと

○教師に手伝ってもらえる安心感

弱味を見せないようにしていた S 児であったが、教師に手伝ってもらうことを通して、次に困ったことがあった時には、自分から「できない」と訴えにくることができた。教師に手伝ってもらってもいいという安心感や、困った時には教師に手伝ってもらえばいいという安心感を学ぶことができたと考える。

(3) 今後に向けて

今後も S 児が素直に自分の弱さを出せるように、弱さを受け止めながらかかわっていきたい。また、やってみないでできないと決めつけている様子も伺われるので、自分でやってみようと思えるように楽しい雰囲気をつくり、失敗しても大丈夫という安心感がもてるようにかかわっていききたい。

砂場の横に色水コーナーを設置して2日目のことだった。色水コーナーにはたくさんの幼児が集まって、2ℓのペットボトルからカップに色水を注いで遊んでいた。S 児は1日目は水をこぼしてばかりだったが、2日目には上手に注げるようになっていた。それが嬉しくて、ペットボトルを握りしめて、友達のカップに色水を注いでいた。

R 児 「(ペットボトルを) ちょうだい」

S 児 「S 児が入れてあげる」

R 児 「R 児にかして」

S 児 「S 児が入れてあげる」

R 児の言葉におかまいなしに、S 児は得意げに R 児のカップに色水を注いだ。R 児は不満そうだったが、まあいいかという表情で赤の色水を加えにいった。そこへ Z 児がやってきた。

Z 児 「貸ーして」

S 児 「S 児が入れてあげる」

Z 児 「貸ーして」

S 児 「S 児が入れるの」

Z 児は S 児が持っていたペットボトルを無理矢理とろうとした。S 児も手を離さない。

S 児 「S 児が入れるの」

しばらく二人でペットボトルの取り合いをしていた。二人ともなかなか手を離さない。とうとう S 児が Z 児の身体を叩いた。

教師 「どうしたの？二人ともすごく怒っているね」

S 児 「S 児が入れるのに、Z 児ちゃんが言うこときかないの」

Z 児は黙って S 児をにらんでいる。

教師 「Z 児ちゃんもすごく怒ってるよ。Z 児ちゃんはどうしたいの？」

Z 児 「Z 児ちゃんは自分で入れたいの」

教師 「Z 児ちゃんは自分で入れたいのね」

S 児 「S 児は入れるの上手だからこぼさないで入れられるの」

教師 「S 児くん、入れるの上手になったからこぼさずに入れてあげたいんだね。でも Z 児ちゃんは何？」

Z 児 「自分で入れたいの！」

教師 「Z児ちゃんに入れてもらおうんじゃないじゃなくて自分の手で持って入れたいのね」

Z児は大きく頷いた。しばらくS児は黙ったままペットボトルを握りしめていた。Z児もずっと怒った表情のままで立っている。S児は顔をあげて、仕方ないと言う表情でZ児にペットボトルを渡した。Z児は嬉しそうに自分で色水を入れ、ペットボトルをS児に返した。S児は返してもらおうと何事もなかったかのようにペットボトルを持って、入れてほしい子がいないか探して歩き出した。

(1) S児の自己表現のあり方

○自分のしたいことを主張する表現

S児はとにかく色水を注ぐことに関心があり、相手が誰であっても関係なく注いであげると主張していた。そして、注いでもらったら相手は喜ぶと思い込んで、Z児にもよかれと思い、自分が注ぐと主張を続けた。Z児は、自分の手で注ぎたいから「貸して」と言っているが、その真意には気づくことはできなかった。S児の経験や発達段階から考えると無理のないことであった。教師がZ児の気持ちを代弁してもなかなか受け入れることができなかつたのは、Z児が望んでいることをイメージできず、ペットボトルを手放すことに不安を感じたからではないだろうか。

○自分と考えの異なる相手を自分の言うことを聞かないと決めつけた表現

Z児は自分で入れてみたいと主張をしているのであり、S児とは考えが異なっただけである。しかし、S児は自分と同じ考えでないときは、相手が言うことを聞かないと判断した。教師がZ児の気持ちを代弁した後、しばらく間があつてS児は、ペットボトルを手渡したが、このときはまだ、Z児の言葉の意味がわからなかつたかもしれない。返してもらつてようやく、S児はZ児が何を望んでいたかを理解することができたと思われる。

(2) S児の社会的側面の学んだこと

○自分とは思いが異なる友達がいるということ

ペットボトルをやり取りする中で、Z児が言うことをきかないのではなく、自分で入れたかっただけだということに気づくことができた。自分の思いが通らなかつた時に、人は初めて他者の存在を感じる。S児にとって、本事例でのトラブルは自分とは思いが異なる友達がいるということに気づく機会になったと考える。

(3) 今後に向けて

S児は語彙は豊富であるが、言葉と行為が一致していないことも多い。そのために、相手の言葉をイメージできず受け入れられないことがある。今後は、教師が言葉を行為にするモデルになったり、S児にも自分の言葉を体で表現させるように、援助していきたい。

朝、S児は保育室に入るなり困った顔で教師の陰に隠れた。しばらく、教師の後ろで保育室に入ってくる幼児らの様子を見ていた。

- 教師 「S児君、何か困ったことでもあった？」
S児 「R児ちゃんとO児ちゃんに、もう叩かないでって言って下さい」
教師 「昨日、一緒にお話した時、R児ちゃんもO児ちゃんももうしないって言ってたけど、あの後、叩いてきたの？」
S児 「叩いてきません。でも、また叩くかもしれません」
教師 「約束したけど、また叩かれるかもしれないなあって心配になってるんだね」
S児 (頷く)
教師 「叩いてきたら、やめて！って怒って言えばいいのよ」
S児 「でも、やめてくれないかもしれません」
教師 「そしたら、今度はやめてって、押してみたら？」
S児 「えっ……」
教師 「ほら、やってごらん」

そう言って、S児に教師の腕を押させた。が、触るような押し方だった。

教師 「そんなのじゃ、お友達はわからないよ。もっと強く」

S児はもう一度教師を押したが、まだまだ遠慮している。

教師 「こうだよ」

今度は教師がS児を押した。

- 教師 「S児君、先生みたいに押してごらん」
S児 「そんなことできませーん」
教師 「そんなんじゃ、やめてくれないかもしれないよ」

そう言って、何度も教師とS児で押し合いっこをした。くり返しているうちに、だんだん強く押せる様になってきた。

教師 「いいぞ！その調子！」

だんだん、S児も笑顔になってきた。楽しそうな雰囲気になりY児やG児らも混じって押し合いっこになった。

(1) S児の自己表現のあり方

○教師に助けてもらおうとする表現

S児はこの1ヶ月前にR児とO児に腕を引っ張られた。自分は何も悪いことをしていないのに、引っ張られたことにショックを受け、それから数日、R児とO児から逃げる様になっていた。そこでS児とR児、O児で話し合った。しかし、それでも安心できず本事例のように教師に助けてもらおうとする姿となった。

○相手に向き合って自分の思いを伝える表現

S児は、語彙が豊富で大人に報告、要求、伝達することは得意である。しかし、自分の思いを友達に伝える経験が少なく、言葉で言ってもわかってくれない相手に不安を感じていた。そこで、相手に向き合うためには、言葉だけでなく体でかかわることも一つの方法である事をS児に伝えた。S児は体でかかわる経験が少ないので、教師を相手に押し合いっこをして、不安感を取り除くことにした。

(2) S児の社会的側面の学んだこと

○言葉だけではない、思いの伝え方

S児は言葉で言えば、思いは通じると思っていたが、R児、O児とのトラブルを通して、それだけでは通じないという不安な気持ちを抱いた。教師の「押してみたら」というアドバイスをから、思いを伝えるのは言葉だけではないと実感することができたであろう。

○友達と体でかかわる楽しさ

S児はよくヒーローごっこをしている。教師には体でぶつかるが、友達には遠慮してなかなかぶつかっていくことができなかった。しかし、本事例で、教師に言われて一緒に押し合いをしている間に他の友達もやってきて楽しい雰囲気になった。このことを通して、友達と体でぶつかる楽しさを感じることができたと考える。

(3) 今後に向けて

今後もS児が安心して自分の思いを素直に表出できるように援助していく。あまりかかわったことのない友達に対しては、思いを出せなくなることもあるので、怒る、泣くことも含めた上での自己表出を支えていきたい。

また、教師が中心となる一斉活動の場面では安心して自分の思いを出しているが、幼児同士のかかわりの中では、自分の思いの出し方がわからず、我慢したり、あきらめたりしている姿も見られる。幼児同士のかかわりの中での思いの出し方を見守り、体験が不足していると思われる場合には、本事例のように実際にやってみて、考えこむ前に体ごと人にかかわれるように援助していきたい。

お店屋さんにお買い物に行くお金が必要になった時のために、銀行コーナーがある。そこからS児が教師のところへやってきた。

S児 「先生、困ったことがあります」

教師 「どうしたの？」

S児 「F児ちゃんが入れてくれないんです」

教師 「そっかあ。どうしてかねえ」

S児 「わかりません」

教師 「聞いてみたらいいんじゃない？」

S児 「先生も来て下さい」

困った表情を浮かべたので、教師もその場についていくことにした。

S児 「どうしてだめなんですか？」

S児が聞くとF児ははさみで紙を切りながら何か言った。が、よく聞こえなかった。

教師 「F児ちゃん、S児君がどうして入れてくれないのか聞いているんだけど、F児ちゃん今、なんて言ったの？」

F児 「いいよって言ったよ」

教師 「さっきはだめだったけど、今はいいってこと？」

F児は怪訝な表情で答えた。

F児 「さっきもいいよって言ったよ」

それを聞いてS児はほっとしたように、F児の隣に座って紙を切り出した。しばらくすると、またS児がやってきた。

S児 「F児ちゃんがまた入れてくれないんです」

教師 「聞こえてないんじゃない？もう1回言ってみたらどう？」

S児 「先生も来て下さい」

S児について行って見ると、F児は黙々とマジックで数字を書いてつくっている。

S児 「入れて」

F児 「●○×△@&」

F児は答えているが、下を向いたままなので、よく聞こえない。

S児 「入れて」

F児 「●○×△@&」

F児がさっきよりちょっと強く言ったが、S児はF児の様子を見ていないので、F児が何か言っているのには気づいていない。

教師 「S児君、F児ちゃん何か言ってるよ。顔を見て言ってごらん」

S児 「入れて」

S児は顔をのぞき込むようにして言った。F児も顔をS児の方に向けて、

F児 「さっきから入ってるでしょ」

S児は少しびっくりしたようだったが、嬉しそうな表情になった。

教師 「二人とも顔を見て話さないから通じなかったんだよ」

S児 「そうですね」

S児は安心した様にまたF児の横に座って紙を切った。S児はF児に話しかけているのか独り言かはっきりしないが、その後も一人でしゃべりながら、紙を切っては数字を書いた。お金ができると、S児は立ち上がってF児の顔をのぞき込んで言った。

S児 「S児、買い物に行ってきたーす」

F児 「●○×△@&」

S児は、そう言ってお店やさんへ向かっていった。

(1) S 児の自己表現のあり方

○遊びの場に入る時に、友達の許可を求める表現

今まで S 児は製作コーナーで遊ぶことが多かった。そこでは、「入れて、混ぜて」と友達の許可を求めなくても遊びの場に入ることができた。しかし、S 児は F 児が先にいる銀行に入るためには、F 児の許可が必要だと考えたようである。遊びの場に入るために友達の許可を求める言葉が出てきたことは、他者を意識した自己表現の芽生えだと思われる。

○表情や空気では安心できず、言葉のやりとりで友だちの中に入ろうとする表現

F 児は一度「いいよ」と S 児に言っているので、S 児を遊びの仲間として認識していた。しかし S 児は、F 児の表情やその場の空気だけでは安心することができなかつた。そのため遊びの場に入る度に許可が必要だと考えたようである。

○自分が安心するために相手の反応を求める表現

「入れて」「混ぜて」の言葉さえ使えば相手は許可してくれると S 児は思っていたのだろう。それなのに、F 児はきちんと返事をしてくれない。「いいよ」という明確な反応がないことに不安になった S 児は教師のもとへ助けを求めてきた。教師の援助によって、顔を見ると伝わることを実感した S 児は、今度は、自ら F 児の顔を覗き込んで、自分が遊びの場から離れることを伝えた。

(2) S 児の社会的側面の学んだこと

○顔を見ると相手の思いがわかるということ

S 児は F 児の言葉をはっきり聞きとることができず、拒否されたと感じ不安になっていた。教師の助言によって、S 児は顔を見て言葉をかけ、F 児の返答・表情から安心感を得ることができた。S 児は、表情からも相手の思いがわかると感じたであろう。

○一度入ったら、仲間になっているということ

S 児は、製作コーナーなど、ものとのかかわりで遊べる場所で遊んでいることが多かったので、遊びの仲間という意識はあまりなかつた。しかし、F 児が「さっきから入ってるでしょ」と言ったことで、一度入ったら遊びの仲間になるということに気づくことができた。その気づきによって、S 児は F 児に「行ってきまーす」と断ってから場を離れたと思われる。

(3) 今後に向けて

S 児は遊びの仲間の存在に気づき、相手を意識した自己表現ができるようになっていくと思われる。今後は、遊びの仲間が意識できるような環境構成、援助を心がけていきたい。

テラスでの忍者ごっこが数日続いていた。S児は黙々と段ボールを並べて忍者の基地をつくっていた。教師も忍者のヘアバンドを付けて、テラスに出た。その姿を見て、S児は段ボールを並べながら教師に話しかけてきた。

S児 「S児、基地をつくっているんだ」

教師 「これは、すごい。かっこいい基地だ。S児忍者がつくったのか？」

S児 「そうなんだ。S児一人で作っているんだ」

教師 「先生忍者も一緒につくっていいか？」

S児 「いいぞ。こっちが入り口だ」

S児も忍者の口調になりながら答えた。しばらくして、一緒につくっていると忍者の仲間がやってきた。

U児 「先生、大変だ。敵がいる」

教師 「どこにいるんだ？」

U児 「あっちだ！」

B児 「行くぞ！」

みんな、一斉にプレイルームに走り出したが、S児はガムテープで黙々と段ボールをつないでいた。

教師 「S児忍者は行かないのか？」

S児 「S児は、基地を修理している」

教師 「そうか、じゃあ、頼むぞ！敵に壊されない強い基地にしておいてくれ」

S児 「わかった」

忍者の仲間とテラスに戻ってくると、S児はまだ修理をし続けていた。そこへ、忍者の仲間が入ってきて遊びだした。S児は嬉しそうに説明を始めた。

S児 「こっちはトンネルになっているんだ。ここに隠れて敵を倒すんだ」

N児やB児、U児らが、「隠れろ」「こっちだ」等と口々に叫びながらトンネルの中に入り、教師も中に隠れた。S児は中には入らなかったのも、教師が声をかけた。

教師 「S 児忍者、危ないぞ。中に隠れるんだ」

教師に引っ張られるようにして S 児も中に入った。N 児、B 児、Y 児らは興奮した表情で穴をのぞいたり、剣をかまえたりしているが、S 児は緊張した表情のままだった。

しばらくして、忍者たちが外へ敵を倒しにいった。S 児は基地を再び修理し始めた。そこへ C 児がやってきて何気なくトンネルの上に乗れり、壊してしまった。それを見た S 児は止めようとするが、言葉が出てこない。そのまま立ち尽くしていた。C 児は特に自分が悪い事をしているという意識はなさそうだった。

教師 「C 児ちゃん、なんで壊すの。大事な忍者の基地なんだよ」

教師の声で、トンネルが壊れたことに気付いた Y 児と B 児が怒りだした。

Y 児 「壊さないでよ。忍者の基地なんだよ」

B 児 「忍者の基地を壊したな！」

その声を聞いて、S 児も安心したのか、やっと言葉を口にした。

S 児 「なんで壊すんだよ」

C 児は、みんなに咎められてばつの悪そうな表情をしながら、トンネルを直し始めた。それを見た S 児もトンネルを直し始めた。

Y 児 「敵が早くこないうちに直すんだ」

教師 「そうだ、みんな力を合わせるんだ」

B 児 「よし。わかったぞ」

S 児 「S 児は壊れないようにガムテープで止めるんだ」

トンネルは直り、また忍者たちは敵を求めて基地から出た。S 児を誘ったが、S 児はガムテープを持ったまま答えた。

S 児 「S 児はここで見張っている」

教師 「S 児忍者任せたぞ」

B 児 「任せたぞ」

S 児は一瞬口ごもりながら、「よし」と答えた。

(1) S 児の自己表現のあり方

○自分のしていることをアピールする表現

S 児は、教師を見るといつも自分がしていることを説明する。この日も同様だった。重たい段ボールを黙々と運んで迷路のようにつくっていたので、その努力や苦労を認めてほしいと思う気持ちがあったのだろう。

○相手の口調に合わせた表現

S 児は、大人には丁寧語を使うことが多い。また、S 児自身よく意味のわからない言葉を使っている事もある。大人の言葉を真似して使っていると思われる。思いをやりとりするコミュニケーションの言葉はあまり聞かれない。

忍者ごっここの時には、教師が忍者になりきって忍者の言葉を使っていたので、S 児もそれに合わせて使ったと思われる。

○自分の気持ちを友達に伝えるのをためらう表現

S 児は、トンネルを壊されて驚きと怒りがあっただろう。R 児やD 児になれば、言い返すことができたかもしれないが、あまりつながりのないC 児にはこの怒りをどのように伝えたらよいのかわからず、戸惑っていたと思われる。

○友達に支えられた表現

忍者の仲間である Y 児や B 児、教師が怒ってくれたことで、S 児は勇気を得たのか、表現の仕方がわかったからか、自分の気持ちを「なんで壊すんだよ」と C 児に伝えることができた。自分が一生懸命つくった基地で忍者の仲間が楽しみ、友達が自分の思いを代弁してくれたことが、S 児の支えになったと思われる。

○友達に呼応する表現

基地が直ってから、忍者仲間が出ていく時に B 児が教師の真似をして「任せたぞ」と S 児に向かって言った。自分に向けられた言葉にどう反応したらいいのか一瞬戸惑ったが、S 児は B 児や教師に呼応して「よし」と答えた。

(2) S 児の社会的側面の学んだこと

○いつの間にか仲間になる楽しさ

今までは自分の剣や武器をつくって自分で楽しんでた。この忍者の基地も友達のためにつくったわけではなかったが、結果的に忍者が集まって楽しい雰囲気ができ、仲間意識も生まれてきた。「入れて。まぜて」という言葉がなくても、いつの間にか仲間になっている楽しい雰囲気を S 児は感じたのではないだろうか。

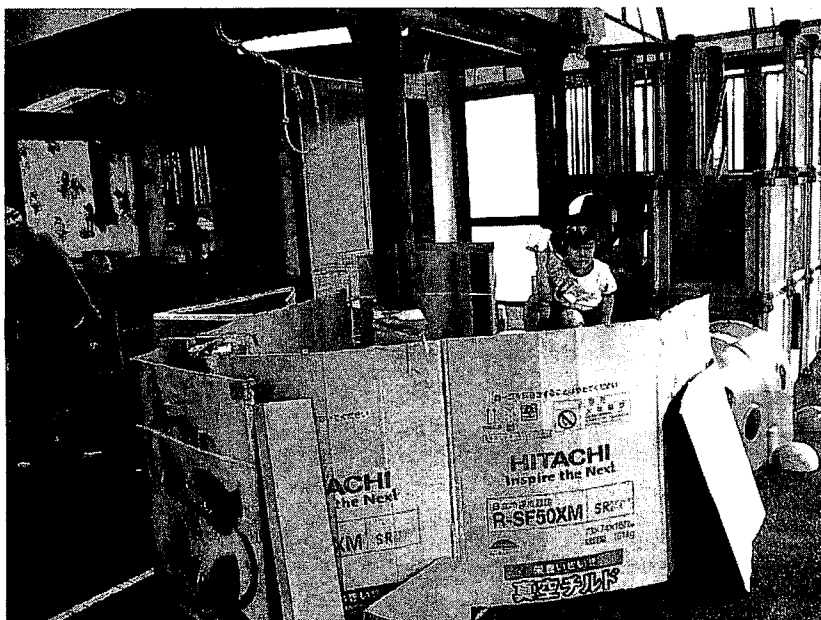
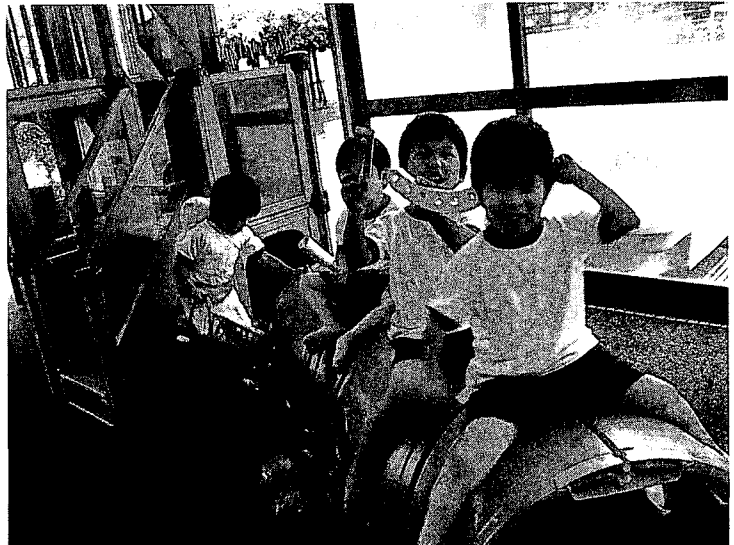
○仲間が自分の気持ちを代弁してくれる嬉しさ

S 児は基地を壊されて悔しかったはずだが、それを表現するすべがなかった。しかし、B 児や Y 児が自分よりも怒ってくれたことは嬉しかったのではないだろうか。そのことが、仲間と同じような言葉で自分の気持ちを出表することにつながったと考えられる。

(3) 今後に向けて

S 児は、大人に対しての言葉、イメージの世界に入り込んだ言葉、自分の行動を説明する言葉をその場に応じて使っている。しかし、思いやイメージをやりとりするコミュニケーションの言葉が少ないように思われる。それは家族とのやりとりが影響していると思われるので、家庭と連絡をとりあったり、園でも思いをやりとりする会話をつなげられるようにかかわる必要がある。

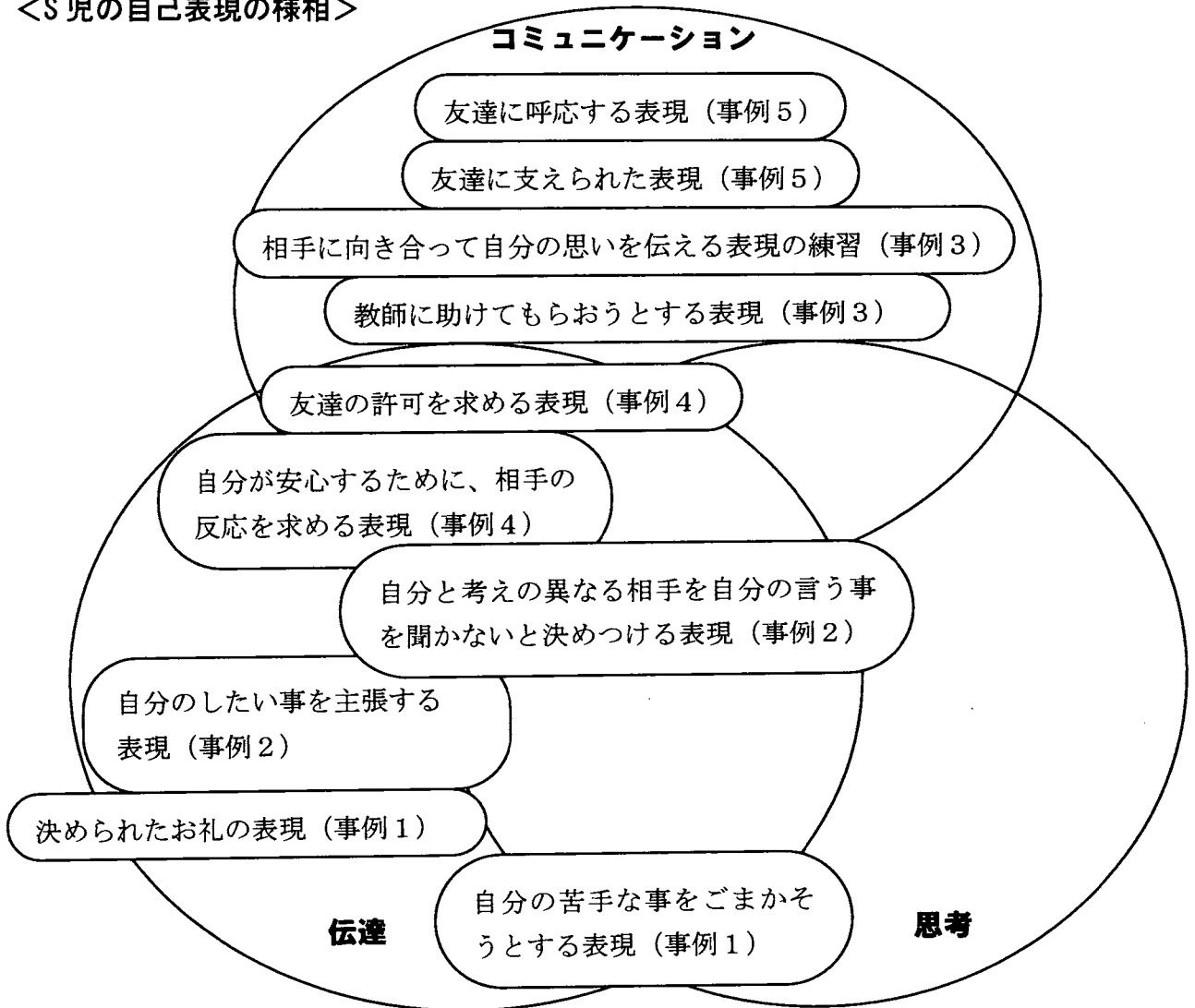
また、本事例で S 児は友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じる事ができたと思われるので、このような遊びを今後も援助していきたい。



～ 一年を振り返って ～

事例を検討する中で、一人一人の自己表現のあり方が、「伝達」「コミュニケーション」「思考」の3つに分けられるのではないかと考えた。S 児の自己表現のあり方から見えてきたキーワードをその3つに分類して位置づけ、その図及び各事例より見えてきたことを考察する。

<S 児の自己表現の様相>



○考 察

<安心感の重要性>

S 児は、入園当初から語彙が豊富で物怖じせずに教師や大人に話しかけていた。しかし、困ったことがあっても「自分でできるから大丈夫」と強がったり、自分の苦手なことは理由をつけてごまかそうとしたりする姿も見られた。S 児が園の生活を不安に感じていると考え、安心して、教師に助けを求めたり甘えたりできるようにと願いかかわってきた。友達が手伝ってもらっているのを見たり、一緒にしようと教師から声をかけられることによって、次第に「できません」「手伝って下さい」と、素直に助けを求められるようになってきた。

一見、言葉巧みに話し、自己表現をしているように見える幼児こそ、不安な気持ちを表現できずに困っていることが多い。1学期は特に、「困った時には教師が手伝ってくれる」、「教師に甘えてもいいんだ」という安心感をもたせることが重要である。

<言葉以外のコミュニケーション要素>

S 児は一人っ子であり、子ども同士のコミュニケーションの体験が少なかった。そのため友達には自分とは異なった思いがあることに気づかずに、自分の思いを押しついたり、相手が悪いと決めつけることがよくあった。そこで、友達の気持ちを S 児が理解できるように言葉を補いながら伝えることを繰り返してきた。少しずつ、友達には友達の思いがあることに気づくことができるようになってきた。

2学期になると、S 児は友達とのかかわりも増え、その分トラブルも多くなった。相手が反応してくれなかったり、体でぶつかったりしてくると、どうしたらよいのかわからなくなり、その場から逃げてしまうことがあった。S 児としては、「入れて」「やめて」などの言葉を使えば、思いが通じると思っていたのだろう。相手に向き合うためには、言葉だけではなく表情や体を使っての表現の方法があることを実感してほしいと願い援助してきた。教師や友達と体を通してかかわったり、同じ場で遊んだりして、言葉がなくても遊びの仲間になれると気づくことができたと考える。

<一緒に遊ぶ楽しさを実感することの大切さ>

3学期は、忍者のヘアバンドを身につけ、友達と一緒に場で遊ぶ楽しさを感じられるようになった。しかし同じ場で遊んでいても、自分の願いやイメージを友達に伝えるには至っていなかった。そこで、S 児が友達と一体感をもてるように、教師も忍者の仲間になって全身を使った遊びを楽しんできた。S 児のつくった忍者の基地が壊された時には、友達が S 児より先に怒りの気持ちを表出してくれた。この友達の支えによって、S 児も友達の真似をしながら、自分の思いを表現できるようになってきた。

同じ場で遊ぶ楽しさ、全身を使って遊ぶ楽しさ、一体感のある楽しさ等、様々な楽しさを体感できてこそ、遊びの仲間に自分の思いを表現できるようになる。思いを表現することを直接的に援助することはもちろん大切だが、たくさんの楽しさを体感させることも自己表現の力を育むためには欠かせない。

